《発行》日本オゾン療法研究所　神力就子

オゾン療法研究 ニュース

統合医療の発展にむけて

No.24

2025.11

早々に秋が去り、冬になって来ました。皆様には如何お過ごしですか。(有)オゾノサンの輸入部門は本年 7 月で、医師の方々のご協力を得て、無事終了致しました。今号から、社会の動向を含めて、**オゾンにまつわるニュース、統合医療の動向などを発信します。**

早速ですが、今年の医療オゾン国際会議は**ルーマニアの首都ブカレスト**で開催されました。日本からは獣医の清水無空先生(学会獣医部会副部会長)が研究発表を行い、日本の獣医部会での活動が高く評価されました。学会発表要旨は次号ニュースに掲載致します。

2025 年 ヨーロッパ医療オゾン国際会議・参加旅行記

清水無空（獣医師、アカシア動物病院）

2025 年 9 月 25～27 日に、東欧ルーマニアの首都ブカレストにおいて、EUROCOOP(ヨーロッパ医療オゾン協力機構)に加盟している開催国の SSROOT(ルーマニア酸素オゾン療法学会)と後援組織である WFOT(世界オゾン療法連盟)の共催で行われた、10th EUROPEAN Cooperation of Medical Ozone Scocieties Congress(第 10 回 EUROCOOP 国際会議)に出席・講演する機会を頂きました。

日本医療・環境オゾン学会からは、上村会長、松村臨床研究部会長、獣医部会の私の3名が代表で出席をしました。国際会議には 20 か国以上が参加し、英語とルーマニア語の同時通訳で行われました。

国際会議は、WFOT と EUROCOOP の加盟国および加盟組織の医療関係者、研究者が集い、医療オゾンの基礎研究から臨床応用、最新技術までを包括的に議論する国際会議として開催されました。2 日間にわたり約 50 題に及ぶ講演とプレコングレスとしてワークショップが行われました。

1 日目（9/24・水）羽田→ブカレスト

新型コロナ後、初めての海外渡航。新調したパスポートを手に、早朝の羽田空港へ向かいました。顔写真登録やセルフチェックインなど、最初は戸惑いもありましたが、無事にゲートを通過。今回はトルコのイスタンブール経由で乗り換えを含めて約 18 時間かけてブカレストへ。日本からルーマニアへの直行便は、まだ運航されていません。イスタンブールの空港は、ヨーロッパの玄関口として各地への乗り換えが多く、新しくて豪華な空港施設でした。次回の国際会議はトルコの予定なので、また参加の期待が膨らみました。

到着した夜、アンリ・コアンダ国際空港では、以前のようなタクシーの客引きもなく、空港にはタクシー予約パネルが並び、配車予約してホテルへ。ルーマニアは空港やホテル、レストラン以外では英語があまり通じない印象でした。ルーマニアの道路は渋滞が多く、車のスピードも速めですが、歩行者優先が徹底されており、車が止まらないと罰金になるそうです。

宿泊は湖畔の四つ星ホテル「CALO」。気温は日本よりやや涼しいものの、日中は 9 月末とは思えないほど暑さを感じました。私は 3 度目のルーマニア訪問でしたが、客引きやスリも減り、治安の改善を肌で感じました。

2 日目（9/25・木）プレコングレスと街歩き

朝食で、上村会長・松村先生と合流し、会場へ。事務局のエミルさんにご挨拶。事前のメール連絡は反応が遅くやきもきしましたが、現地では丁寧に対応していただきました。ロビーにはスポンサー企業のブースが並び、オゾン発生器やオゾンサウナ、自然療法のクリームや注射薬などが展示されていました。

会場の周辺にはスーパーやモールもあり、非常に便利。日本のようにコンビニはありませんが、売っているものや物価を見るのに地元のスーパーに行くのは楽しみです。歩道にはシェア電動スクーターが放置されており、横断歩道では車がきちんと止まってくれるのが印象的でした。

午後はプレコングレスの実習プログラムへ。全くルーマニア語がわからなくても、注射手技のデモは“見て学ぶ”ことができるのが魅力です。

夜はモールでフードコートに挑戦。地元の人が行くお店は、メニューもあまり英語表記がないので注文に苦戦しました。ルーマニアは、ヨーロッパの中でも物価が安く、日本人の味覚にも合う食事が多いと感じました。

3 日目（9/26・金）学会 1 日目：国際舞台の空気

朝は EUROCOOP と WFOT のセレモニーで開幕。30 分刻みで講演が続き、夕方までノンストップ。参加者は約 150 名、半数以上がルーマニアの先生方でした。残念ながら、ルーマニアの SSROOT の会長は、体調不良のため欠席。EUROCOOP の顧問であるレナーテ先生も今回は録画講義のみでお会いすることはできませんでしたが、キューバの Leon 先生など東京の国際会議でお会いした先生にも再会することができました。ドイツとスペインからは参加者が少なかったように思います。

会議中に、地元テレビ局から「日本から来た獣医師にペットのオゾン療法の話を聞きたい」と突然の依頼があり、拙い英語ながらインタビューに答えました。

夜は上村会長が各国の代表会議に呼ばれたため、私と松村先生はホテルのバーで遅くまで留守番をして談笑しました。

4 日目（9/27・土）学会 2 日目：まさかの“大トリ”

プログラム予定をギリギリまで調整していたようで、事前通知が一切ありませんでしたが、当初1日目の最後の演題とホームページで確認していました。しかし、当日のプログラムを見ると、私の講演が最終日の最終演題に。他の演者も質疑応答の時間はほとんどなかったので、原稿を用意して少し安心していたのですが、最後の出番だと質疑がたくさん来るかもしれないと思いましたが、獣医の演題に興味・期待を持って頂いていると前向きに考えました。

演題は、「獣医療におけるオゾン療法の臨床応用：日本からの症例報告と最新トピック」で、日本の獣医のオゾン療法の歴史と現在の学会の活動。犬や猫では基本的にオゾン注腸法と他の手技を組み合わせる

という方法が最も良く行われていること。当院での犬猫の腫瘍、椎間板ヘルニア、腎疾患などの症例報告、キセノン光やオゾン化グリセリンなどの日本からの新しいトピックを紹介しました。

終了後、次々に質問があり、十分な英語の理解と回答ではありませんでしたが、ブカレストで開業する獣医師からも質問があり、連絡先を交換することができました。医療ではなかなか試しにくい新しいアプローチも、「動物で安全性を最優先に検討し、根拠を積み重ねる」ことで可能性が広がると、改めて感じました。

夜は華やかなガラディナー。食事とお酒と会話、音楽が流れるとダンスタイム、国際色豊かな交流を楽しむことができました。ヨーロッパの学会に参加すると、国は違っても、はるばる参加した同志をファミリーとして歓迎してくださり、また参加したいと思いました。

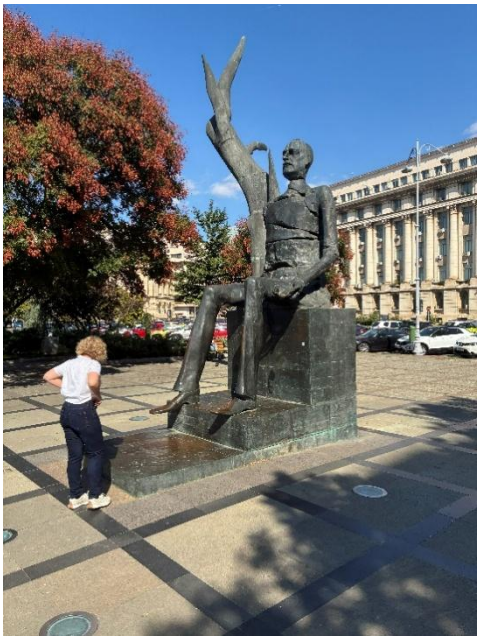
5 日目（9/28・日）旧都の記憶を歩く

最終日の朝、次々に自国に出発する先生方と挨拶をして、別れを惜しみながら再会を誓いました。上村会長・松村先生は当日の夕方帰国予定だったので、お世話になっているルーマニア人の先生に、市民バスの乗り方指南、ルーマニアの住宅訪問、お土産購入や、伝統料理の店へ案内してもらい、念願のモツスープやサルマーレ（ロールキャベツ）を堪能。その後、大学広場や革命広場を徒歩で巡り、約 10km の街歩き。旧体制の記憶と新しい街並みが同居する、どこか懐かしい空気を感じました。市内にはかなり動物病院も多く、ペットを飼う余裕のある裕福層も増えているという印象を受けました。

その夜は荷造りをし、翌朝早く空港へ。出国手続きの大混雑に追われつつも、無事に帰国便に乗り込みました。

会場にて

右から上村医療・環境オゾン学会会長、松村臨床研究部会会長、清水獣医部会副部会長



1989 年 12 月、ルーマニア革命が起こった場所

当時の独裁政権のチャウシェスク元大統領が、数万人の民衆に向けて体制支持の演説をした。しかし民主化を求めるデモが広がり、独裁政権は崩壊した。

旅を終えて

国際会議で発表の機会を得たこと、そしてヨーロッパでオゾン療法を実践する医師・獣医師との新たな繋がりを築けたことは大きな成果でした。また次回も日本からの参加者を募って、ぜひ国際会議に参加したいと思います。国際会議の中で、特に獣医療におけるオゾン療法が果たす役割はまだ大きな可能性を秘めています。今後、獣医のオゾン療法分野での動物用のプロトコールや研究、論文執筆につなげたいという思いを胸に、再び羽田へと降り立ちました。